

## 2022年6月

---

### 今日

プッシュテスト。もっとプッシュテスト プッシュ自動化テスト。

githubの操作練習

### 20220613

githubでのファイル管理に手を出してみた。ポメラ上のフォルダを順番に出力するシェルスクリプトを作成することができた。しばらく使ってみて改良を重ねてから、qiita1にでも投稿してみようかなと考えている。

githubのすべてのリポジトリをpullするシェルスクリプトを作成した。効率化自体が目的になり、効率化そのものが楽しいと感じる。あまり良くない気がするが.....。

### 20220616

~~明日、『またぞろ。』の2巻が発売される。人間が苦手な主人公を扱った良作。応援したい。発売は27日だった。全然違う。~~

『八本足の蝶』にて、「少女」と「女の子」は全く違うものだという主張があった。ここでいう「少女」は特に、ものを書く男たちが扱う概念のことを言っている。また物語の中で扱われる「女」の概念も、「少女」が大人になったものとしての女であり、現実の「女」とは別物だということだ。百合を書く人間として、これは何を訴えているのか、あるいは何を「訴えられているのか」考えていく義務があると思った。

バタイユ-ラヴクラフト-庵野秀明 最近はこの間を言ったり来たりしている。時々円城塔。上位者というものの存在について、それぞれの考察や表現が参考になる。GPSのようだ。

会社の終わりに本を買いに行った。ラヴクラフト全集の5巻が目当てだった。Amazonで配達してもらってもよいのだが自分の手で開いて中身を見てから買いたいと思った。中身を確認しているかどうかを判断したいわけではない。買うという意思は既に固まっている。ただ本を購入するための儀式として書店に行くのだ。強いて言えば、衝動買いをしたくて行っただけとも言える。他に欲しい本は思い付かなかったが、本屋に行けば何かしら手に入り、ついつい買ってしまうだろうと思ったのだ。儀式は浪費（蕩尽）と強く結びついている。実際に、『存在と時間』『論理哲学論考』の解説書をそれぞれ購入した。私は蕩尽がしたくて本屋に行ったのだろう。

githubの機能の1つに気付いた。GitHub上のフォルダにcommitした回数を日ごとに記録しているらしく、しかもその頻度を緑色の濃さによって可視化している。GitHub界限では「草が生える」と呼ばれているらしい。これには少し笑ってしまった。

今日はあまり調子が出なかった。明日は頑張ろう。

### 20220617

読みたいと思った本『2021年のディープラーニング論文を1人で読むアドベントカレンダー』上下 普通に興味があるし仕事の参考にもしたいなと思っている。

『デバヤシ・フロム・ユニバース』 お笑い百合。ずっと求めていたジャンルなので是非とも読みたい。

『空想科学読本「ウルトラ科学研究」編』 シン・ウルトラマンを観てSFの観点から見た怪獣ものに非常に興味が湧いてきた。

観たいと思った映像『ウルトラQ』 日本最初の怪獣特撮映像。 ラヴクラフトとの共通点や差異を探してみたいと思う。

## 20220621

### 購入した本

『なぜ宇宙は存在するのか 初めての現代宇宙論』

『「余剰次元」と逆二乗則の破れ 我々の世界は本当に三次元か?』

『Newton別冊シリーズ 次元のすべて』

### 印象に残った文章

野村泰紀『なぜ宇宙は存在するのか 初めての現代宇宙論』(ブルーバックス)

太陽系の大きさは銀河に比べて無視できるほど小さいため、(中略)、太陽系のまわりではダークマターの分布は完全に一様だと考えることができます。そのため、惑星に働くダークマターからの重力は全ての方向に等しく働き、キャンセルされてしまうのです。これが、太陽系の惑星や衛星の運動を考えると、ダークマターの効果を入れなくてもよい理由です。(もしダークマターが惑星の運行に大きな影響を与えるようであれば、ニュートンの法則はあの時代に見つかっていなかったかもしれませんが.....)

==>最後の文章に惹かれた。非常にSF的ではないか。ダークマターによって重力による現象が乱されるような宇宙であれば、科学は全く違ったものになっていたかもしれない。

この宇宙が加速膨張しているという事実は、私たちの宇宙には何か物質以外のものが満ちているということを意味しています。この「何か」は、加速膨張の源、すなわち重力のもとで実質的に斥力として働くものでなければなりません。この未知のエネルギー源(重力はエネルギーに応答する)は、その正体を特定せず集合的にダークエネルギー(日本語では暗黒エネルギー)と呼ばれています。

==>これが真空のエネルギーか。放射性魔法少女のネタにしたい。

マルティン・ハイデッガー『存在と時間』(ちくま学芸文庫)

自己であるかぎりおのれ自身の根拠をすえなくてはならないけれども、この自己はいつになってもその根拠を意のままにすることができない。にもかかわらず、自己は実存しつつ、根拠であることを引き受けなくてはならないのである。おのれの被投的根拠を存在すること——このことこそ、感心が関わらせられている存在可能なのである。

==>少しわかりにくいので別の解説書の訳を引用

池田喬『ハイデガー『存在と時間』を解き明かす』(NHKBOOKS)

自己は、自己そのものとしては自分自身を根拠づけざるをえないのに、その根拠を支配することは決してできないし、それでいて、実存しつつ根拠であることを引き受けるしかない。

==>これは生きていて感じる。責任というものの存在をどこまで認めるのかという話にも繋がる。

## 考えたこと

小松左京はAIではなく「人工実存」というものを想定した。これは小松左京が実存主義に傾倒してサルトルなどを読んでいていたこととも繋がっているのだろう。ハイデッガーに傾倒している身としては「人工現存在」というものを提案したいと感じる。

## 20220623

二次元キャラとVTuberの楽しみ方の違い。存在としてのVTuber。他者としてのVTuber。二次元キャラは作者にとってもファンにとっても他者であり対象。一方VTuberは、演じる人本人にとっては自己そのもの。ファンにとっては他者。演じる人が対象として演じていたとしても、不用意な発言などの何らかの不祥事があった際、ファンは演じる人とVTuberを同一のものとみなす。

### フォロワーのツイート

俺は二次元を推す理由に『推しに変わってほしくないから』っていうのがあるんですけど、不変を願うには、最近のVはあまりにも脆いんですよね。その脆さ、儚さ、ゆえの一瞬の煌めきや輝き、リアルタイム性も価値だとは思いますが、それは人間のものだから、やっぱり違うものだなと思うんですよね。

有限なキャラクターに対して、無限のYouTuber。

・声優によって演じられるキャラクター ・テーマパークのクルー(ディズニーランドのタートル? など) ・掲示板のまとめサイト ・VTuber それぞれの自我と役割は少しずつ違う。演じられる者と演じる者との距離は 演じる者やその運営者とファントでは見え方が異なっている。

例えば声優ラジオでは、キャラの声で言ってほしいことを投稿したりする。しかしこのときキャラクターと合わない台詞が発されたとしても その発言によってキャラクターが損なわれたと感じることは少ない。その投稿を選んだスタッフや演じた声優への不満の声は上がるかもしれない。

ファンはキャラクター性を問いかける。何に向かって問うのか。テーマパークのクルーでは、キャラクター性を演じられる者に問いかける。そして演じる者は経験や訓練、そして持って生まれた才能などを駆使して、演じる者にキャラクター性を代入する。テーマパークのキャラクターの場合、キャラクターは既にある。例えクルーがしくじって問題発言をしようと、キャラクターを演じられなかったという評価が与えられるだけで、キャラクターのキャラクター性は揺らがない。(アトラクションとしての信用は揺らぐかも知れないが)

VTuberでは事情が異なる。

あらゆる人類の営みは記述されなければならない。

Linux化したポメラ、確かに集中は出来るしカスタマイズもできるけど 流石に労力が大きすぎる。書くこと意外に脳や時間のリソースが奪われてしまうのであまり良くないのかもしれない。

『存在と時間』について「用具性を持った現存在」という概念を想定することは可能だろうか。

## 20220624

『存在と時間』面白い。久しぶりにmacbookを取り出した。せっかくなので最近構築したVScode-Githubによる執筆環境をこちらにも再現した。githubのアカウントでVScodeの設定や拡張機能を同期できるので非常に便利だ。ユーザーフレンドリーすぎて憎たらしくなってしまった。頑張って環境構築したのだし、執筆して行きたい。執筆環境を整えることにばかりことにばかりかまけていては結局何も書けないのだ。

次に来るマンガ大賞2022に再び『またぞろ。』がノミネートされていた。前は期限を完全に忘れていて投票することができなかったの今回こそ投票したい。

投票することができた。前回の反省

- できるだけ印象に残る投票コメントを書こうとして投票することがタスクとして非常に重いものになってしまった。別のエディタや媒体で下書きをしてから書こうとしたが、それをする事自体がしんどくなってしまった。
- 3つ作品を選ぼうとして、どれにしようかと迷って悩んでしまった。まだ読んでいない作品で応援すべき作品があるのではないかと感じてしまった。例えばTLでオススメされていた作品など。

今回

- 投票コメントはその場でスマホを使って書いた。下書きをしたら確かにクオリティは上がるかもしれないが、投票できないことの方がよっぽど重大だと自分を納得させた。
  - そもそも投票コメントは必須記入欄ではないのだ。そこに何かを書くというのがそもそも自己満足でしかない。何かいいコメントを書いたら投票結果に影響が出るかもしれないとか、投票コメントが他のユーザーの目に止まった時にそれがきっかけで読んでもらえるようにしたいとか。考えることはいくつもあがるが、そこを必死で我慢することが、生きるコツなのだと思う。
- 『またぞろ。』のみへの投票にした。その時選ばなかったのなら仕方がない。現時点で自分が投票したい漫画はこれだけなのだから1つだけ投票すればいいと自分を納得させた。

もし『またぞろ。』の世界に次にくるマンガ大賞があったとしても、主人公の穂波殊は投票することができずに期限切れを迎えてしまうのだろう。穂波殊は、これから少しずつ人間として生きられるようになっていくのかもしれないし、最後までそれはできないのかもしれない。どちらの展開だったとしても、読者にとっては救いになるのではないかなと思う。

## 20220624

ここに書いた内容、人に見せられる部分だけ切り出してnoteか何かに出したいな。ある程度書くのが習慣になってきた。ポメラのような、文章を書くことに専念するための機器は確かに集中するのにはちょうどいいんだけど、どれだけ制限してもどうにかしてネットを見たくなる時がきてしまう。その時の衝動は恐ろしく強烈で全く抗うことができない。それならば、時々ネットを覗いてしばらくしたら戻ってくるというやり方ができる方が自分にはあっているのかもしれない。タスクに追われた時、ネットに依存するのもちろんあるが、タスクをこなすための媒体に触れなくなってしまう。現実逃避のために触る媒体とタスクをこなすための媒体が一緒になっている方が実は締め切りに追われる人間にとっては都合がいいのかもしれない。そんなことを考えながら今日は寝ることにする。

公募のめ切をまとめるページを作成した。PCのエクセルで管理していたが、わざわざPCを開いてエクセルを立ち上げないと見ることができなかった。いつの間にか全く確認しなくなってしまった.....という反省を踏まえて、公募リストもgithubで公開してしまえばいいじゃないかという結論になった。

## 20220627

『またぞろ。』を読んでいる。応援してくれている人に偽りの頑張りを伝え続けて、その時の褒められと現実とのギャップに引っ張られて心が張り裂けそうになる状況、とてもわかるなあと感じた。

「まだしっかりしたいと思ってるの？ それとももうずっと一人じゃ何もできないままでいいと思ってるの？」  
 「わ 私は.....！」  
 「.....どうなんですかね？」

「いや もちろん ちゃんとした人間になりたいなあとは常々」  
「でも実際こんな感じですか？ ちょっとどうしようもないな～みたいな」

最低な会話だが、これが主人公穂波殊の偽りのない現実。それがいたたまれない。

「気持ちは真人間になりたいのに行動はそうならない」

「こと お前は結局何がしたいの？」

頑張ってみよう、と声をかけてくれる人と、頑張りすぎないようにと声をかけてくれる人。その2人の間で引き裂かれるときもある。

## 20220628

### 読書について

『存在と無』の第1章を少しだけ読んでみた。前回読んだときよりも書いていることがわかる。『存在と時間』をある程度読み進めて言葉の使い方や言い回しに慣れていたからこそなのかもしれない。自分の成長を感じて嬉しくなった。

マルティン・ハイデッガー『存在と時間』(ちくま学芸文庫)

待遇には、その積極的な容態についていうと、二つの極端な場合がある。

その一方の待遇は、相手からいわば「苦勞」を取り除いてやるもので、配慮において飛び入りをして、相手の身代わりを務めてやる。この待遇は、相手が当然配慮すべきものごとを、彼に代わって引き受ける。この場合、相手はその場から押しのけられ、後ろに控えていて、配慮されるものがすっかり手に負えるようになったあとで、これを後から引き取るなり、あるいはすっかり解放されるということになる。このような待遇では、「世話」になった相手は依存的になり、たとえ暗黙のうちにでも支配を受けることになりやすい。こうした支配は、それを受ける相手にそれとして気づかれなくても存在するものである。このように、相手の「苦勞」を取り除いてやる「世話好きな」待遇は、相互存在を広汎に規定していて、大抵は用具的なものの配慮に関わるものである。

これに対してもう一つの待遇の様態は、相手に代わって飛び入りをするというよりも、むしろその実存的な存在可能において相手に**率先**するものである。それも、相手の「苦勞」を取り除いてやるためではなくて、むしろそれを本当の意味で「配慮」すべきこととしてあらためて彼に返還してやるためである。この待遇は、本質上、相手の本来的な関心事、すなわち彼の実存に関わるものであって、相手が配慮するものごとにかかわるのではないから、彼がその関心において透視的になり、**それへむかって自由**になるのを助ける。

==>どちらかという「配慮される」側になることが多い人間として、かなり痛感するものがあつた。他者に配慮してもらったときには、そこから取り除かれた「苦勞」を見逃さないようにしなければならない。知らぬうちに取り除かれた「苦勞」が自分の周りには山ほどあり、それによって自分の周りの人々を傷つけている可能性があるということを了解していなければならない。取り除かれた「苦勞」にむかって自分から飛び込んでいく必要がある。